

母子〈もうし〉と蛇〈じゃ〉の鱗〈うろこ〉（三田市母子・永沢寺）

母子の永沢〈ようたく〉寺を開かれた通幻禪師〈つうげんぜんし〉は、お墓〈はか〉から生まれられたと伝えられています。その話というのは・・・。

ある村に一軒〈けん〉のあめ屋がありました。その前を一つの葬式〈そうしき〉が通りました。その晩のことです。

しとしとと降る雨の音を聞きながら、あめ屋のじいさんとばあさんは、なくなった女の人の話をあれやこれや話をしていました。

コトリと入口の方で音がし、風もないのに灯りがブーンと消え、土間〈どま〉に青白い光がして、その中に一人の女の人が、ずぶぬれになって立っていました。

「あめを一つください。」

と、いって一文銭〈もんせん〉を出しました。その銭〈ぜに〉のつめたいこと氷のよう、じいさんはぞおっとしました。あめをもらった女の人は、スーツと外の暗〈やみ〉の中に消えていきました。

それから女の人は、毎晩毎晩同じ時ごとに、同じように現われました。

じいさんとばあさんは、こわくなり気味〈きみ〉が悪くなり、お寺の和尚〈おしょう〉さんに助けを求めました。

和尚さんは、心よくひき受け、六日目の夕方からあめ屋へやって来て、女の人のくるのをじっと待っていました。あたりは真暗〈まっくら〉になり女の人の現われる時こくになりました。

コトリと音がしてスーッと、女の人が現われました。この世の人の顔ではありませんでした。

和尚さんは、物かげからその様子〈ようす〉をじっと見守っていました。

女の人はあめを一つ買うと、大事そうにかかえるようにして、戸外にスーッと消えました。

和尚さんは、すばやくとび出しすぐそのあとをつけて行きました。

その女の人は、ゆらゆらゆれるようですが、地をうくようにして藪〈やぶ〉の影〈かげ〉にすいこまれました。そこは新しいお墓です。女の人の消えたそのお墓の中から、

「ほぎゃあ。ほぎゃあ。」

赤ん坊の泣き声と、赤ん坊をあやすような女の人の声がするのです。

和尚さんは、とびあがらんばかりにおどろきました。

しかし、今はおどろいてはいられません。

和尚さんは、無我夢中〈むがむちゅう〉でお墓を掘り返しました。

すると、どうでしょう。この前なくなった女の人のそばに、丸々と太った男の赤ん坊が、泣きながら片手にあめをしっかりとぎりしめていました。

和尚さんは、すばやく赤ん坊をだきかかえると、あめ屋へとんで帰りました。

「じいさんや、この子はなくなった仏のさずけてくださった子だ。大事に育てなされ。」

と、いって赤ん坊を渡しました。

赤ん坊は、じいさんとばあさんに大切に育てられ、すくすくと成長していきました。

赤ん坊が物心〈ものごころ〉つく頃、じいさんから今までの話を聞かされ、出家して坊さんになり、修業〈しゅぎょう〉をして諸国をまわり、遂に通幻禪師というらしい坊さんになられました。

その通幻禪師が今の母子にやって来られ、永沢寺という大きなお寺を建てられました。そして、この地を母と子の深い愛のつながりから、母子とよぶようになったといわれています。

禪師が禅堂〈ぜんどう〉で、坐禅〈ざぜん〉をしていられたある夜のことで、外に人の気配〈けはい〉がするのです。

「何者だ。」

と、お尋〈たず〉ねになりました。すると、

「私は、まだ成仏〈じょうぶつ〉に縁〈えん〉の遠い女です。どうか、菩提〈ぼだい〉の道をお教えてください。お願いでございます。」

と、頼みました。

しかし、禪師は、女が堂の中へはいることをお許しになりませんでした。ただ解脱〈げだつ〉の道をお授〈さず〉けになりました。女は大変よろこんで、十七日の願をかけた。その十七日目に再びやって来ました。

「お前は、ほんとうの女ではない。この山内の池にすむ龍〈りゅう〉女だろう、さあ、正体〈しょうたい〉を現せ。」

と、問いつめ、呪文〈じゅもん〉を教えられました。

その女の人は、教えられるままに呪文をとなえました。

と、一陣〈じん〉の風と大きな音とともに、大きな大きな、龍の姿となりました。

「おかげ様でもとの姿にかえることができました。これも禪師様のおかげです。お礼に私の鱗〈うろこ〉をさし上げます。」

と、いって、脇腹から九枚の鱗をぬきとり禪師に渡しました。

いよいよ昇天〈しょうてん〉する時がきました。

龍は、
「私がとび立つ時にあとに井戸ができます。これから先、日でりが続いて作物ができない時は、この私の鱗をもち出し、井戸の蛇沐水〈じゃぼくすい〉をかけて、雨乞〈あまごい〉をしてください。きっと雨を降らせて進めますから鱗は宝として大切に。」
と、いったかと思うと、大風と水煙、土煙をまき起し西の空高くまい上がっていきました。

それから、鱗は寺の宝として倉に大切に保管〈ほかん〉され、かんばつの時にこの鱗を出して雨乞をすることになりました。雨乞をして、雨の降らなかつた時は一度もありません。それどころか、大雨や大雷雨〈らいう〉となり、大あれにあれた年もあるということです。

